「のだ」に関する先行研究

朝倉　かおり

はじめに

「田中さんは大学で勉強している」という表現に対し「田中さんは大学で勉強しているのだ」という表現もあるように、日本語の会話や文章には、「～んです」、「～のです」を始め、「～のですか」、「～のだろう」、「のだから」などの言い方がよく用いられている。これらの言い方には「のだ」という形式が共通に含まれている。「のだ」という文末表現は日本語教育では初級レベルの段階で教える項目であるが、日本語学習者の「“行きますか。”と“行くんですか。”の違いは何ですか。」という質問に代表されるように、「～だ」と「～のだ」との相違は理解しにくいので、外国人の日本語学習者にとっては「のだ」の習得が難しいのである。

「のだ」は文脈や状況によって様々な意味を持っているので、習得するのも、指導するのも困難である。実際、学習者の「のだ」の非用、誤用もとても多いと指摘されている。このような状況は、「のだ」の指導において、有効な教授法が確立されていないということの反映でもあると思われる。敬語などと比べると、「のだ」の研究はまだ新しい分野であり、最近進んできたものの、まだ体系的に研究されていないのが現状である。そこで、本稿では、「のだ」に関する研究の歴史を概観し、「構造・意味」及び「日本語教育」の視点から「のだ」に関する先行研究をまとめてみる。そして、先行研究に存在している問題点を明らかにし、今後の研究課題を提示する。

尚、先行研究において「のだ」に関する表記は「ノダ」、「のだ」、「～のだ」、「のだ文」など、様々であるが、本稿では各研究で使用されている表記をそのまま用いることにした。

Ⅰ.「のだ」の構造と意味

Ⅰ－1　三上章の研究

三上（1953）は「コノ本ヲ読ミマシタカ？」と「コノ本ヲ読ンダノデスカ？」を比べ、「意味やニュアンスの違いはどうもはっきりしない。」と「のだ」の解明を試みた。彼は、「のだ」の構造に着目して、「ノ」を準体助詞とみなすという従来の見解に対し、「ノ」は体言としての重要な資格（連体法の内部の主格を“ノ”に変えることのできる性質）を失っている点を根拠にして「ノデアル」を準用言とみなした。

例１）雨ガ（１）降ル→雨ノ（１’）降る日ハ天気ガ悪イ

例２）手紙ガ（２）来タノガ（３）遅レタノダ→手紙ノ（２’）来タノガ（３’）遅レタノダ。

例１では、「雨が降る」は「日」という名詞に接続されると「雨の降る日」とのように「が」は「の」に変る。しかし、例２では「ガ」（２）は「ノ」（２’）に変わるが（３）の「ガ」は「ノ」に変らない。この点から「のだ」の「の」は、「が」を「の」に変える性質である

「ガノ可変」を失っているため、三上は「の」を準体助詞と認めず、「のだ」を準用言とみなしたのである。

次に、三上は「である」文を単純時、「のである」文を反省時と名付け、「何々する」の部分を既成命題とし、「何々するのである」を話し手の主観的責任の準用言と捉えた。またこれが反省時の根本的意味であると主張した。三上は「“何々シタ”はいきなり言う言方であり、反省時の方は連体命題“何々シタ”と提出“ノデアル”との間に隙間というか余裕というか、或る反省的な距りが介在する。だから単なる報告でなく解説という調子が出てくる。」と述べている。彼はまた、「単純時は報告であって、センテンスの一つ一つが独立して使われ、順々に言いつゞけられて体裁をなして行くが、反省時による解説は文脈の解決をめざすものだから、何らかの場面を前提として使われるものである。つまり前文と関係的に出てくるもの。」とも述べている。三上は「のだ」の文脈との関係について、「反省時は前のセンテンスと関係的に成り立つ複式のセンテンスでは一文の中にこの関係が織り込まれることがある。」と指摘している。一方、用法については、まだ確定しておらず、今後の研究に譲りたいと述べたものの、「理由・結論」などの用法があることを提示している。

Ⅰ－2　久野暲の研究

久野（1973）の「のです」の意味・用法についての分析は以下の通りである。

①「ノデス」は、話し手が先に言ったこと、したこと、あるいは、話し手の状態（元気が無いとか外出の身支度をしているとか）に対する説明を与える用法である。

②「ノデスカ」は、話し手が見たこと、聞いたことに対する説明を求める。

③ a「ノデス」は説明を、「カラデス」は原因・理由を表す。
　b「ノデス」が説明しようとする事象は、先行文として言語化されなくてもよい。

④「ノデスカ」の後に依頼文・命令文が来ると、しばしば非難の意味が出てくる。

⑤ 話し手が直接的に現在のシチュエイションを観察したような場合には、その観察に対する質問は、「ノデスカ」という形で行わなければならない。

Ⅰ－3　紙谷栄治の研究

構文の観点から「の」を準体助詞とみなし、「のだ」を「の」と「だ」に分けることはできないという三上の主張に対し、紙谷（1981）は、異論を提示し、以下のような見解を出した。

例３）自動車{が・の}ゆっくり走っている<u>の</u>{がみえる。・をみていた。}

例４）彼{が・の}ことわる<u>の</u>は目に見えている。

例５）使い方{が・は}意外に簡単である<u>の</u>を見ても、この機械が普及していることが頷ける。

例６）利用者{が・は}一部の人に限られている<u>の</u>が大きな問題になっている。

例３・例４の場合は「の」と「が」のどちらも使用できるが、「が」のほうがより多く

使われる。例５・例６の場合は準体助詞「の」に上接する節には「が」か「は」を用い、「の」を使用するのが少ない点から、「の」が名詞としての性質を失っていないと紙谷は主張している。また、紙谷は「断定・疑問・推量・否定・接続」の各表現における「の」について考察し、次のような結果を得ている。

① 断定表現においては、判断の対象を強調するときには、強勢の他に「のだ」の形をとることが必要である。

② 疑問・推量・否定・接続などの表現においては、疑問・推量の対象は、述語の直前部分に限られるときは「の」を介さないが、それ以外の部分や文全体になるときは「の」を介する必要がある。

③ 命題の形で提出したものに対し、話し手が疑問・推量などを表す場合は、構文的に「の」を介する必要がある。

④ 「彼女は子どもを寝かせようとして歌っていたのではない。」のように、「の」は「～て」の形を命題の中に入れる機能を持つため、連体修飾語の被修飾語になることができるので、名詞の性質を持っている。

以上、紙谷は構文の観点から、「の」を準体助詞とみなし、「の」と「だ」を分けるべきであると論じている。

Ｉ－４　松岡弘の研究

「のだ」と「わけだ」は同一の文脈に表れることや、互換が可能であることから、両者が類似した構造と意味を持つ点に着目した松岡（1987）は、まず「わけだ」の構文と意味を明らかにした上で、「のだ」に言及した。彼は「わけだ」には「Ｐ（理由）とＱ（結果）の間に何らかの関係がある」ことを話者が認めて納得しているという基本的な意味があると考えている。彼は、Ｐという理由が消去される場合は「Ｑわけだ」を用いて「ＰだからＱだ」という意味を表し、結果であるＱが消去される場合は「Ｐわけだ」を使って「Ｐだ。それでＱだ。」という意味を表すと説明している。松岡は文の構造の図式化が日本語教育において有効な方法だと主張し、その関係を以下のように図式化してみた。

① Ｐを知って、Ｐ→Ｑの関係を納得する場合⇒［(Ｐ脱落）Ｑ］わけだ。

② Ｑを知って、Ｐ→Ｑの関係を納得する場合⇒［Ｐ（Ｑ脱落)］わけだ。

③ 話者が自分の話していることは聞き手も承知のことで、あえて因果関係を述べなくても納得してもらえると判断した場合⇒［－、Ｑ］わけだ。

松岡は「わけだ」の意味内容と構造をＰ・Ｑの関係確認により、どちらかが消去されると分析したが、「のだ」もこれと同様であると述べ、次の様に図式化している。

④ Ｑを知って、Ｐ・Ｑの関係を確認・主張する→［Ｐ（Ｑ脱落)］のだ。

⑤ Ｐを知って、Ｐ・Ｑの関係を確認・主張する→［(Ｐ脱落）Ｑ］のだ。

⑤ Ｐ・Ｑの関係意識が話し手の中で未分化あるいは融合している場合は［－Ｑのだ］となる。

松岡は上の「のだ」に関する図式は、「のだ」を含んだ文が理由を表すことも、結果を表すこともでき、またそのどちらでもないという矛盾を日本語学習者が視覚的に理解でき、誤用の減少に有効であると述べている。

Ⅰ－5　吉田茂晃の研究

吉田（1988）は「のだ」という文末形式の意味範囲が広く様々であることに着目し、「ノダ形式」が使用される文脈条件や言語状況の違いによって起こる表現効果について考察した。吉田は「のだ」の構造を「準体助詞の“の”＋述語化要素」と定義した上で、「ノダ形式」が発生する状況を明らかにし、それによって生じる「表現効果群」を整理した。彼は「ノダ形式」文を「２句１文」（A）と「１句１文」（B）に分類して分析した。

①　２句１文（A）について

例７）皮膚が荒れているのはビタミンが不足しているのだ。

主語句と述語句の内容が同一の事態であり、述語句が主語句の内容を言い換えている表現である。これが「換言」と名づけられた。

②　１句１文」（B）について

吉田は「１句１文」における「ノダ形式」の表現意図を、α群（相手に伝えるための叙述の体言化）とβ群（自分が受け止めるための叙述の体言化）に分類した。彼は、α群の表現意図の一つ目は「聞き手が知らない情報の提出」で、「告白・教示・強調」などの意味合いがある。α群表現意図の二つ目は「話し手が実現したいこと、あるいは聞き手に実現させたいことを指定すること」であり、「決意・命令」などの意味合いがある。一方、β群の表現意図の一つ目は「自らの認識内容を言語化して確認し、自らへ帰納させること」であり「発見・再認識」などの意味合いがある。β群表現意図の二つ目は聞き手への「確認」である。β群表現意図の三つ目は意図の程度は低く、語調を整えるに過ぎない「整調」と、人称に関わる「客体化」である。

以上から分かるように、吉田は「ノダ形式」の表現効果を「換言・告白・教示・強調・決意・命令・発見・再認識・確認・整調・客体化」に分類した。

１－６　小金丸春美（野田）の研究

小金丸（1990）は「のだ」をムードの「のだ」とスコープの「のだ」に分類し、それぞれの機能について考察した。

小金丸によると、ムードの「のだ」は、話し手が提出する命題と状況や文脈との関係を示し、説明以外にも命令や決意などの様々な機能を持っているという。また「のだ」の組成に関しては、彼女はスコープ「のだ」は「の」＋「だ」であるが、ムードの「のだ」はひとつの助動詞として用いられると説明している。つまり、ムードとスコープとでは「のだ」の組成が異なっていると主張している。

スコープの「のだ」では、否定文の場合、下の例８と例９のように、「のだ」の使用・不

使用によっては、否定される内容が異なってくる。
例８） 私は終戦の年に生まれなかった。
例９）私は終戦の年に生まれたのではない。

例８は「生まれる」という事実そのものを否定しているが、例９では「生まれた」という事実はあるが、それは「終戦の年」ではないことを示している。つまり、例８が全否定であるのに対し、例９は部分否定となる。彼女は、文のどの部分が否定されるのか、即ち「否定等の作用が及びうる範囲」をスコープとし、その「作用を集中的に受ける部分」をフォーカスとした。「のだ」を用いない文では、否定・断定・疑問の対象は「述語によって示されることがらの成立」に限られるので、それ以外の部分を否定・断定・疑問などのフォーカスにするためには、スコープの「のだ」が必須であると述べている。

彼女はまた、同じ文に「のだ」が一つある場合と、二つある場合の違いを比較してみた。
例 10）お前に聞いている<u>ん</u>(1)じゃない<u>ん</u>(2)だ。
例１１）さと子に聞いている<u>ん</u>(3)だ
例 10 の「ん」（１）はお「お前」をフォーカスにするためのスコープ「のだ」であり、「ん」（２）は文と話し手の発話時の状況を結びつけるムードの「のだ」である。例 11 の「ん」（３）は「さと子」をフォーカスにするためのスコープの「のだ」であると同時に、文と状況を結びつけるムードの「のだ」でもある。このように、「のだ」はそれぞれ単独で使用する場合も、ムードとスコープの両者を重ねて使用する場合もある。例 11 から分かるように、ムードの「のだ」とスコープの「のだ」は明確に区別することが容易ではない。

Ｉ－７　衛東の研究

衛（1990）は「のだ」を構造・使用条件・ムード表現の３つの観点から考察をしている。衛は、判定詞「です」と結合する「の」は前接する叙述内容を一体言に取りまとめる構文的役割を持っていることから、「の」を「準体助詞」とみなしている。彼は、「のだ」は聞き手の存在を意識し、聞き手に対しての話者の主観的な情意が加わっていると述べ、聞き手が存在することと聞き手目当てであることが「のだ」の使用条件であると主張している。彼はまた、話者の主観的な情意であるムードについては「解釈的答弁・回答・原因理由への解釈・命令・部分的否定・自分では及ばない事態に対する感情的な心情」などの用法があると述べている。

Ｉ－８佐治圭三の研究

佐治（1991）は「こと」と「の」及び「ことだ」と「のだ」の比較を通して、「のだ」について考察した。彼によると、文の構造としては、「の」は狭義の準体助詞であるが、文における機能としては、「の」の前の述語の連体形によって表されることを固定化する機能を持つという。そのほかに、「のだ」は、状況に基づく判断の表現にもなる。その表現の意味は勧誘・当為、詠嘆、疑問文、解説・説明・説得、二重判断等があると佐治は指摘して

いる。

Ⅰ－９田野村忠温の研究

田野村（1993）は「のだ」の構造については、断定の助動詞「だ」に前接する用言を体言として「だ」に接続させるために「の」を加えると述べている。彼は、基本的に「のだ」文は「～は～だ。」という主題―解説型の文であり、「の」には意味的に積極的な機能がなく、形式的な現象であると指摘している。

彼によると、「のだ」の基本的機能は、ある事柄の「背後の事情」や、事柄の具体的な説明にあるが、現実の言語活動には、事柄の具体的な説明のない文も存在しているという。これについて田野村は、具体的な事柄の説明がなくても、「実のところは」というように、聞き手には知り得ないような種類のことがらが話し手の意識の中にあり、それを主題として、事柄の次第を聞き手に伝えようとするときにも「のだ」を使い、その用法を「実情を表す」用法と呼んでいる。

Ⅰ－10　「構造・意味」のまとめ

以下に、「のだ」に関する先行研究を「構造・意味」の観点から整理する。各研究者の観点を比較しやすくするために、日本語教育の分野Ⅱで扱う各論もここに取り上げることにした。

まず、「構造」の観点から、「のだ」に関する先行研究を以下のように整理した（表１参照）。

表１　「のだ」の構造

「のだ」の構造		支持する研究者
１語	組立時の準用詞	三上
	文末詞	奥津
	助動詞	小金丸（ムード）
２語	準体助詞「の」＋「だ」	紙谷・小金丸（スコープ）・佐治衛東
	準体助詞「の」＋述語化要素「だ」	吉田
	形式「の」＋助動詞「だ」	田野村

次に、「意味（用法）」の観点から「のだ」に関する先行研究を表２のように整理した（表２参照）。

表２　「のだ」の意味

研究者	「のだ」の意味
三上	持続・保証・一般化予定・催促・理由・結論・完了・過去の状態・習慣的思わせぶり・段取り

久野	話し手の既成事実や状態に対する説明・話し手が見聞きしたことに対する聞き手の説明・非難（のだ＋依頼文・命令文）・話し手による現状況の観察
紙谷	断定・疑問・推量・否定・接続
松岡	Ｐ・Ｑの関係を確認・主張
吉田	２句１文～換言 １句１文～告白・教示・強調・決意・命令・発見・再認識・確認・整調・客体化
小金丸（野田）	スコープ～強調・主張 ムード～文と話し手の発話時の状況を関係付ける
衛東	解釈的答弁・回答・原因や理由への解釈・命令・不審や不満への反問部分否定・自分の力の及ばない事態に対する感情
佐治	勧誘・当為・詠嘆・疑問・解説説明・説得・二重判断
田野村	背後の事情・実情を表す
花城	説明・判断・確認・前置き・強調

Ⅱ．日本語教育における「のだ」の研究

Ⅱ－１　葉照子の研究

葉（1999）が日本語教育の立場から、「のだ」に関する教科書での扱いと日本語学習者の誤用例を分析し、それによって「ノダ教授」の混乱の要因を解明しようとした。

彼女はまず、初級レベルの教科書をＡタイプ（て形のみ提示）とＢタイプ（て形以外の活用形も提示）に分け、「のだ」がどのように提示されているかを分析した。その結果、Ａタイプの教科書では、「動詞たい＋のだ」、「形容詞＋のだ」に限定され、「説明的表現」の他は語彙レベルの扱いで「慣用的表現」として位置づけているということが分かった。

一方、Ｂタイプの教科書では、て形以外の活用形も提示され上接する文も名詞・動詞・形容詞文などにわたり、説明・慣用表現の他に「強調」という説明が出現している。一般的に学習者は教科書を基本として習得するため、Ｂタイプの教科書で学んだ学習者は「のだ」を「強調」意味で使用することが多くなり、不自然あるいは不適切な発話になってしまうことが多い。従って、葉は初級レベルでは「強調」という意味より、他の意味機能から導入したほうが学習者の誤用を防ぐことができるのではないかと指摘している。

Ⅱ－２　田代ひとみの研究

田代（1995）は、日・中・韓それぞれの母語話者に同じテーマについて説明文を書かせ、その文章表現を比較することによって、中・上級レベルにおける日本語学習者の問題点を提示するとともに、日本語の談話構造を解明しようとした。文章を永野（1986）の三分類

（客体的表現―客体的事象の叙述・主体的表現―主体的立場の陳述・通達的表現―読み手への働きかけ）に従って分類し、以下のような結果を得た。

① 文章の大半は客体的表現となるが、主観的表現の割合は日本語話者のほうが高い。主体的表現「のだ」では、「ＹがＸを言い替えたり、実情を説明したりする」という使い方が共通して多いことがわかった。また、日本語話者は説明機能の使い方だけであるが、中国・韓国語話者では「理由や原因の根拠を表す」使い方も見られた。

② 書き手によって「のだ」は個性的且つ自由な使い方をされる。

③ 日本語話者は「のだ」を一定の用法、一定の箇所で使用しているが、日本語学習者には日本語話者のような特徴は見られなかった。

以上の結果を踏まえて、田代は、今後の作文指導において「のだ」の用法・機能を整理し、文章中において「のだ」がどのような役割を持っているかを指導することが必要であると指摘している。

Ⅱ－３　山本忠行の研究

山本（1995）は中級レベルの日本語学習者の作文に見られる問題点を明らかにし、作文指導における留意点についても提案した。「のだ」の指導に関する教材は初級レベルからあるが、初級レベルでは用法の細かい点は説明されていないため、中級レベルで「のだ」の様々な用法を整理する必要が出てくる。しかし、山本は現状ではこれに配慮した中級の教科書は少ないと指摘している。彼は作文における問題として、「のだ」の多用を挙げている。談話の場合は話し手と聞き手の間に暗黙の了解事項があれば、「～んです」から始めることが可能であるため、作文でも談話と同様に「～んです」から始める学習者が多いが、作文ではそれは誤用になる。彼はこのような誤用を防ぐためには、中級でいくつかの文を、その意図に従って並べ替えるような練習が必要であると指摘している。また、客観的・論理的な文では「のだ」の使用を必要最低限にすることや、前提も文脈も無い場合には「のだ」を用いてはならないことを指導する必要があると述べている。

一方、山本は中級の初めでは、学習者は「のだ」が使えない現象があることを指摘している。そこで、いつ「のだ」を使うのかを明確にすることも指導上重要であると述べている。彼は「疑問・問いかけ」の場合、「なぜ～のか」というように疑問詞がある場合は理解しやすいが、「本当なのですか」のように疑問詞がない場合は、「本当ですか」という誤用になる傾向があると指摘している。このような誤用を防ぐには、疑問詞がなくても「話者が想定した内容・聞き手が想定している内容」などの前提があり、単純質問ではないときは「～のですか。」となることを理解させなければならないと述べている。

さらに山本は、「のだ」と共起する副詞・指示語との呼応が崩れている点を挙げている。今後の課題として、山本は「のだ」の用法を会話と文章の相違という観点から分析し、それを日本語教育に生かしていくことを提示している。

Ⅱ－4　今村和宏の研究

今村（1996）は上級日本語学習者が論述文の読解において文末表現「のだ」をどのように読み取り、且つ、作文でどのように運用すればよいかを検討した。そして、その指針を与えるにはどのような指導をするべきかについて検討した。

まず、彼は上級レベルの日本語学習者が「日常会話の特定の状況（感情的であったり強調するような状況）で「～んだ／んです」を使うことはあっても、論文を読むときには文末の「のだ」に注意を払うことがなく、自分が書く際には、ほとんど使わないというのが一般的である。」と「のだ」習得の現状を分析している。その理由として、学習者が「のだ」の使い方がよく分からないこと、客観的な記述や論文調の文章では「のだ」は必要ないと考えている学習者も少なくないことを挙げている。しかし、日本語母語話者の論述文には「のだ」の使用頻度は低くない。さらに、「のだ」は読者に伝えたい内容を納得させるという機能も果たしているので、談話構成にも密接に関わっている。故に、日本語学習者の「のだ」の非用は「文の調子」を捉え損ない、論文の意図が読み間違えられる可能性があることを今村は指摘している。

そこで、今村は「内容を噛みしめる・独創性のあることを主張する・問いかけ・説得・啓蒙」など、「のだ」の使用基準のルール化を行った。

Ⅱ－5　花城可武の研究

花城（2000）は、日本語学習者に縦断的且つ横断的にインタビューを行うことによって学習者の「のだ」使用について考察した。

まず、縦断的調査の結果、説明の「のだ」が最も多く、続いて前置き・判断・強調・確認の順で使用されることが分かった。また、学習時間の長短・レベル・滞日期間と「のだ」の使用には関係性が乏しいことも認められた。

次に、横断的調査の結果、説明・強調の「のだ」と「のだ」の不使用については日本語母語話者と日本語学習者との差異はあまり無いが、前置きの「のだ」使用については、かなりの差が見られた。

以上の考察から花城は、教師は学習者に単文ではなく談話レベルで「のだ」を意識させ、「のだ」を使用する状況を学習者に気づかせていく努力が必要であると述べている。

Ⅱ－6　日本語教育における先行研究のまとめ

Ⅱでは、日本語教育における「のだ」の習得やその指導法の問題点について、概観した。「のだ」を「いつ」・「どのように」使うかなど状況と使用の関係を明確にし、それをどのように指導していくのか、今後も検討し続けなければならないと言えよう。

Ⅲ.「のだ」に関する研究の問題点と課題

「のだ」に関する研究は比較的新しい研究分野ではあるが、様々な研究が行われてきて、

今日にわたった。しかし、花城などが指摘したように「のだ」の習得は学習時間や日本に滞在する期間の長さとは比例せず、上級レベルに至っても誤用が少なくないことから、日本語学習者にとって「のだ」が学習困難な項目の一つであることがわかる。しかし、「のだ」に関する効果的な指導法がまだ確立されていないのが現状である。

一方、「のだ」を1語と捉えるか2語と捉えるかの結論はまだ出ておらず、意味も多岐にわたっている。よって「のだ」の構造や意味は不明確でまだ統一されていないのも問題である。もしかすると、これが指導法の確立を困難にさせている要因であるかもしれない。

従って、「のだ」の構造・意味を解明させ、統一させることが急務だと考えている。そのためにも、文法のみならず、作文や会話などの視点から多角的に考察することが必要であろう。また、他の言語との比較を通して、日本語「のだ」の持つ特性をはっきりさせることも大事である。なぜならば、それが効果的な教授法の確立に役立つと思うからである。

引用文献及び参考文献

1．今村和宏　「論述文における『のだ』文のさじ加減」(1996)『言語文化』33　一橋大学

2．紙谷栄治　「のだ」について（1981）京都府立大学学術報告「人文」第33号　京都府立大学

3．久野暲　『日本文法研究』(1973) 大修館書店

4．小金丸春美　「ムードの『のだ』とスコープの『のだ』」(1990)『日本語学』VOL.9 明治書院

5．佐治圭三　『日本語の文法の研究』(1991)　ひつじ書房

6．田代ひとみ　「日本語学習者の文章における叙述表現の一分析　(1995)『言語文化と日本語教育　第9号』　日本語言語文化学研究会

7．田野村忠温　「『のだ』の機能」(1993)　『日本語学』(10月号)　明治書院

8．衛東　「日本語のムード表現の一形式」(1990) 上智大学冬期国文大会発表論文

9．花城可武　「『のだ』文の習得」(2000)　『南山日本語教育第7号』　南山大学

10．松岡弘　「のだ」の文・「わけだ」の文に関する考察（1987)『言語文化』24　一橋大学

11．三上章　『現代語法序説』(1953)・『現代語法新説』(1955)　くろしお出版

12．山本忠行　「中級学習者の作文に見る『のだ』の誤用」(1995)『創価大学別科紀要9号』　創価大学　別科

13．葉照子　「初級日本語学習者における『ノダ』の使用例からみた誤用の類型について」(1990)『九州大学留学生教育センター紀要　第2号』九州大学学生育センター

14．吉田茂晃　「ノダ形式の構造と表現効果」(1988)　『国文論叢 15』神戸大学文学部国語国文学会